

デンマークで福祉研修を行なう理由

NPO 法人福祉フォーラムジャパン副会長

NPO 法人日本アビリティーズ協会 会長

一般社団法人 障害者の差別の禁止・解消を推進する

全国ネットワーク会長

元内閣府障害者政策委員会差別禁止部会副部長



伊東 弘泰

デンマークは、世界中でもっとも行き届いた福祉制度を確立した国のひとつとして知られています。この研修ツアーはいちはやくリフトや昇降式浴槽の活用により持ち上げない介護を実践し、介護従事者の健康や利用者の尊厳を実現しているデンマークで施設への導入、運用、運営について施設見学や機器メーカーのショールームの訪問・研修で学びます。今なぜデンマークの福祉を学ぶ意味と必要があるのか、ご紹介をいたします。

福祉に力を入れていて経済成長の高い国

デンマークでは、国民の医療・教育・福祉は原則として国家の責任と負担により提供されています。つまり無料です。一方で、平均的な国民の税負担は所得の50%程度、付加価値税は25%という、高福祉高負担の国でもあります。しかし、医療や福祉、教育にそれほど力を入れていながら、デンマークは世界中で経済成長率をもっとも高い国のひとつで、経済は安定的に発展しています。また食料自給率はなんと300%。国民が必要とする食料の3倍も生産しているという、豊かな国です。

私自身、最初にデンマークを1986年に訪れ、これまでに50回以上も訪問しています。国民の生活は豊かで、余裕のある暮らしぶり、そのためか穏やかな国民性を感じます。そして何よりも国民の8割が、「税金は高いけどデンマークに生まれてよかった」と誇らかに言えるこの国はすばらしいと思います。デンマークは人口540万人。日本と比べれば小国です。ではそのデンマークがなぜそんなにリッチな国になったのでしょうか。

200年前はとても貧しい国だった

もともとは大変貧しい国でした。アンデルセン童話に、「マッチ売りの少女」という話があります。アンデルセンは1805年、今から200年ほど前にオーデンセで生まれました。家は貧しい靴屋でした。苦しい生活と闘いながら歌曲や詩の勉強をし、幸運にも援助してくれる人がいて、大学に入ることができ、才能を發揮し、小説家としての地位を築いていきました。「マッチ売りの少女」の物語は、雪の降る寒い大晦日の夜、暗い通りをみずぼらしい女の子が一人、帽子もかぶらず、はだしで歩いているシーンで始まりま

す。おなかはぺこぺこ、寒さのためにぶるぶる震えながら歩いている哀れな少女。マッチは1本も売れずに通りの家と家の間から身を縮めてうずくまってしまいました。あまりの寒さに売り物のマッチを1本すりしました。目の前に暖かいストーブが浮かび、しかしずっと消えました。また1本すりしました。真っ白い布のかかっているテーブルにはスモモやりんごを詰めたガチョウの丸焼きが湯気を立ててのっけていましたが、また消えました。また1本と、すっているうちに死んだやさしいおばあさんが光り輝いて立っているのが見えました。少女は全部のマッチをこすり、おばあさんに抱かれる夢を見ながら死んでいったのです。その頃のデンマークはこの童話にあるように、どこの家もとても貧しかったのです。

デンマークが福祉に力を入れた理由

1929年の世界大恐慌では国民の多くが職を失い、みな食べるものにも窮しました。政府はこの苦しみを二度と国民に与えてはいけない、と本格的に社会福祉制度の確立への取り組みを開始しました。

元福祉省大臣のアナーセン教授は、かつて私にこう語られました。「所得が少なれば生活が苦しくなります。所得を確保するためには仕事や雇用を確保しなければなりません。また人口が少なれば国の生産力も拡大しません。デンマークでは女性も含め、国民全体が質の高い生産力、担い手になってもらう必要があります。だから、医療、育児、福祉・介護などに力を入れる必要があったし、質の高い労働力の確保のために教育を充実し、金持ちだけが医療や教育を受けられるのではなく、国民の誰もが健康で、社会に必要な人材になることが必要だったのです。そこで国民すべてが安心して働ける制度や環境づくりに力を入れてきました。」

デンマークでは出産後、病院から退院してくると、何も連絡しないのに、保健師がすぐに自宅に訪ねてきて、サポートを開始するそうです。病院と地域(市)との連携がしっかり取れているからです。また国民全員にケースワーカーが付いていて、何か問題があったり、制度の利用などについてわからないことがあれば、その解決やアドバイスに協力してくれるそうです。日本では、何か制度を利用したくても、国民が役所に申請しないかぎり受けられません。デンマークは、大違いで、国が積極的に国民を支えているのです。

経済大国なのに貧困率世界 4 位の日本の不思議

わが日本は世界第2の経済大国と言われてきました。でも実態はどうでしょうか。わが国の貧困率は2005年15.3%、2008年15.8%と悪化し、OECD加盟国中一位がメキシコ、2位トルコ、3位がアメリカで、なんと日本は4番目に貧困な国に転落しました。失業などで生活できなくなったり、さまざまな問題を抱える人が多く、自殺者は毎年3万人を越えています。デンマークでは、自殺はあっても精神的な病がその原因であって、貧困で自殺する人はいないと、ネストヴェズ市の福祉部長は明言していました。日本では2000年に公的介護保険制度ができました。しかしサービスを受ける際の1~3割の自己負担を払えないことなどを理由に、介護サービスを利用しない人が数十万人もいます。家族介護のために一家の働き手が仕事をやめたり、ついには家族介護も不可能となって、親殺しや老夫婦の心中などの事件は毎週のように全国でおきています。最近では新聞やテレビのニュースにも

ならなくなってきました。

都会の公園や大通りにはホームレスの青いテントが林立しています。失業者は増え続け、また国民平均の実質収入は減り続けています。デンマークのような社会福祉の充実した国では、「国民を飢え死にさせないこと」をキーワードにしているそうです。

理念だけでなく、費用対効果に厳しいデンマーク

デンマークが国民のために福祉や医療に力を入れているとはいえ、決して国のお金をジャブジャブ使っているわけではありません。高齢者や障害者の福祉について、できるだけ主体性や尊厳性を確保することを大切にしつつ、国民負担が重くならないよう効率性を図っています。費用対効果についての国民全体の意識はわが日本よりもたいへん厳しいものがあります。

2010年1月、デンマークは特養ホーム(プライエム)を全廃し、「新しいケア付住宅(プライエボリー)」に発展させました。フレキシブル(柔軟性)とセキュリティ(保障、安全性)を融合化した新しい理念と取り組みは「フレキシキュリティ」という新たな言葉、概念をデンマークに創出しました。また、福祉にかかわる様々な専門職の教育、人材養成にたいへん力を入れていることは福祉の質を高めています。わが国では、短時間の研修と形ばかりの試験で介護保険サービスに従事できる。デンマークでは最低でも14ヶ月もの教育がなされます。サービスの質を確保し、適切に提供されることを重視しています。今回の視察研修では介護サービスを提供する側のスタッフの健康や安全をしっかりと守りながら、援助を必要とする高齢者や障がいのある人に質の高いサービスを提供し、自立と尊厳を確保する理念と活動を学んでいただきたいと思います。「高齢期にどこで、どのようなケアを受けることが、真の自立[自律]なのか？」を考える機会となりましょう。いま日本でも福祉関係者やサービス従事者が、『尊厳を保つ』ケアという言葉をやたらと口にしますが、『尊厳あるケア』とは、実はどういうことなのか？を学ぶことができる研修視察になります。

新しい理念と方法に取り組むデンマークの福祉を学んでいただき、新たな日本の福祉、高齢者ケアを皆でつくりましょう。

